最優秀（高校生の部）

学び続けるということ

広島県　崇徳高等学校　二年
大江（おおえ）　美咲（みさき）

私は幼稚園の年長の時に「ぴかドンたけやぶ」という音楽劇をやった。現代の広島に住む主人公が、竹やぶの中で原爆投下時にタイムスリップし、逃げ込んできた動物や大火傷を負った少年を介抱し、最終的に少年は元気になって竹やぶに感謝をするという話だった。当時六歳だった私は、この話を「怪我をした少年を守ってくれたやさしい竹やぶ」の話だと思っていた。そして、この竹やぶが実在すると知り、母にお願いして見に行った。竹やぶは坂の上の大きな民家の裏に堂々と存在していた。六歳の私にも、竹やぶの存在感を感じることができた。

五年後、今度は妹が幼稚園で同じ音楽劇をやった。でも、劇を見た私の感想は五年前とは全く違っていた。苦しむ少年に「死んじゃダメ！生きるのよ！」と呼びかける場面に、思わず涙が出そうになった。原爆投下後の広島では、「死んじゃダメ！」と言った人、そう言われながらこの世を去ってしまった人。「生きるのよ！」と言われ強く生き抜いた人が、きっと何万人もいたと思う。こんなにも強く、命の大切さを訴えていた話だったのかと、改めて気づかされた。

そして再び、あの竹やぶに会いに行った。同じ場所にまだ竹やぶは存在し、静かに立っていた。しかし、竹やぶの前には民家ではなく新しくマンションが建っていた。竹やぶの存在はすっかり薄くなっていて衝撃を受けた。

私は卒園後に、父の転勤で五年間広島を離れていた。五年ぶりに広島に戻り、妹の音楽劇で久しぶりに原爆や平和について考える機会を得た。

母は昔、「小さい子に原爆なんてわかるのかしら？」と思っていたそうだ。確かに六歳の私はわかっていなかった。でも、学ぶ機会さえあれば成長とともにわかってくる。もし広島に戻ってきていなかったら、私は今でも正しく理解していなかったかもしれない。

「知は力なり」という言葉がある。広島では小さいころから平和について学ぶ機会がたくさんある。戦争や原爆の恐ろしさ、身の回りの戦争の遺産、人々の思い、それらを正しく学び続けること。それが平和を願い、未来を平和に変える力になると私は信じている。